

農における放射能影響 F G
「福島県相馬郡飯館村における農地の現状調査」 レポート

1. ふくしま再生の会でのヒアリング

「ふくしま再生の会」を訪問し、この団体の取り組みについての話を伺った。

棚田のようになっている水田の上段から表土を掻き出して下段に放射性物質を集約させ、上段の農地の放射線量を低下させるという取り組みや、農地に水を張ることで水の遮蔽効果を利用し、農地近辺の空間線量を下げる取り組み、また農地から排水した放射性物質を含む水を溝状に掘った部分に蓄え、溝の表土に放射性物質がとどまることを示す取り組みなど、今後の除染活動や農地の再生のために活かせる方法を試験していた。

試験的に農作物の作付も行っているが、イノシシやサルなども多く出没するようになっている点などもうかがった。

2. 飯館村各地の見学

飯館村を回り、放射能に関するものをいくつか見学した。

まず訪れたのは、村内各地に設置された放射線量のモニタリング機器である。線量計のデータと併せてそのエリアの写真を転送することで、そのような自然状況の時に線量がどのように変化するかを推測することができる（たとえば積雪によって空間線量が低下することなどが判明した）。空間線量を定点で測定し続ける機器は大学の研究室によるものだけでなく、政府や他の機関によって設置されたものもあった。

また学内でケースを募集していた「フリスク線量計」についても、廉価なモニタリング装置として実際に機能している現場にも訪問した。同時に実施している、雨天時に流出する土砂に含まれている放射線量を測定するための装置から、採取した土砂を取り出す作業も併せて行った。

その他にも、盛土によって放射線量を遮蔽する取り組みを行っている土地や、1. のヒアリングでも伺ったイノシシやサルが農地に入ってきている現場などを見ることができた。また各地を回る際には色々な場所で放射線量を測定し、その分布が一様ではない事（少しずらしただけで大きく線量が変わる場所がある、道路の脇や傾斜の下部など、線量が高くなりやすい場所には傾向もある）を確認した。

3. 所感

今回の調査は、私にとって震災後の福島に入る最初の機会だった。私はこれまでも農業と放射性物質については関心を持っていたが、主に注目していたのはフードシステムの川下にあたる、消費者行動に関する部分だった。今回の訪問で、個人的にはなじみの薄いいわゆるフードシステムの川上の現場を訪問し、様々なものを見ることができた。

その中で今回の訪問で最も印象に残っているのは、作付ができずに放置されている広大な農地である。除染などの対応を待つうちに荒れていく農地目にする中で、このままでは農業再開への道りは険しくなってしまうという危機感を覚えた。政府の復興方針の中にも「迅速」という目標は掲げられているものの、農地に関しては現地の方が納得できるだけの成果が挙げられていないのが現状ではないかと感じた。

現時点ではまだ多くの課題が残されていることを実感した訪問となった。今後も放射能の問題については真剣に考えていきたい。



図1. 作付を行わっていない農地と、そこに出没したイノシシ。



図2. 農地の地表にひびが入っている(中央の穴は動物の足跡)。ここから放射性物質が入り込むことで、少し深い場所でも線量が高くなる場合がある。